

現実的なものは合理的である、そして、
合理的なものは現実的である

吉田賢右

京都産業大学タンパク質動態研究所シニアリサーチフェロー

ヘーゲルの哲学はわからない。「法の哲学」をちょっと見てもわかりそうもないので、しゃべり言葉で書かれた「歴史哲学講義」を読むと、アフリカ人や東洋人について間違った認識と激しい侮蔑の言辞があふれており（黒人は奴隷としてアメリカに売られるより野蛮なアフリカにいる方が悲惨だ・・・などと述べている）、いくら190年前の著作とはいえ、はなはだ不快になる。しかし、ヘーゲルの命題には、考えさせるものがある。この小文のタイトルの「現実的＝合理的」の恒等式もその一つである。この前と後の2つの文はお互いに独立で、正反対のことを意味している。



「現実的なものは合理的である」といえば、それはこの世に存在している事物・事象は合理的である、ということで、現実の正当化であり保守の精神となる。そして、ヘーゲルは、実はこっちの方を思想の背骨としているように思える。国家、それも強力な国家をとほうもなくもちあげて、「国家は神の理念が地上に実現したもの」とまで宣言したのもそのあらわれと思える。国家というもの、現代においては国民国家というもの、その支配やエゴイズムや覇権がこの何世紀というものの人類史の最大の問題となっている、というのに。

「合理的なものは現実的である」といえば、合理的なものは現実化する、というのであるからこれはラディカルな革新者の信念になる。ヘーゲルの弁証法を批判的に引き継いだマルクスは、この立場に立った。いわく「哲学者たちは、世界を様々に解釈してきただけである。肝心なのは、それを変革することである」。彼は、資本主義の分析から合理的必然的に導かれる社会主義の実現を信じた。社会主義は、必ずしも倫理（自由・平等・博愛・正義）の実現としてではなく、合理的な思考の結果、人類史の次のステージとして構想されたのであるが、幸運にも倫理的な要求をも同時に実現するよう見えた。こうして、社会主義は多くの人々の希望となり、この実現のために膨大な努力が払われた。しかし実現した社会主義国家なるものは、期待したものとまったく違ったものに変容して現在ではほとんど崩壊してしまった。そもそも社会主義には存在の合理性に重要な欠失があった。市場経済と民主政治という優れたフィードバック装置なしの社会主義は経済も政治も安定せず、資本主義への復帰と独裁に転げ落ちるほかなかったと思われる。存在の合理性において、社会主義は資本主義に負けたのである。

ヘーゲルは社会や歴史についてこの命題を考えたのだが、自然科学についてこの命題はいつそう明解に理解される。「現実的なものは合理的である」、すなわち、現に存在しているもの、あるいはその運動・変化は、すべて科学的に説明できるはずだ、ということである。これ

は理性的な人間、なканずく科学者の信念である。たしかに、自然科学は多くのものの存在の仕組みを法則に基づいて説明し、その変化を予測するのに成功している。もちろん、今、説明のできない事象も多いが、それも将来の科学の発展によって説明できるようになるだろう。これを認めれば、その対偶、「合理的でないものは現実的ではない」も無条件に正しい。つまり、合理的な存在保証をもたないものは実際に存在しない（できない）のである。神や佛に合理的な存在保証を与えられるだろうか。

では「合理的なものは現実的である」というのは本当だろうか。科学的に根拠が与えられるものは存在を許される、ということである。これは、その存在が人間の日常的な感覚や常識で認識できるかどうかにかかわりないことである。たしかに人間の想像力のおよばない事物・事象が存在する。まず、思いつくのは虚数である。私たちの実感の実数をとらえることはできるが、虚数となると実体的に想像することはできない。それでも虚数は合理的思考の結果として存在していると言わざるを得ない。古典力学は実感でわかるが、「物質は波であり粒子である」などという量子力学はなかなか想像ができない。しかし、量子力学の有効性と矛盾の無さは、量子力学的世界の存在を信じるに十分である。相対性理論もしかり。天文学では、中性子星もブラックホールも、合理的な存在根拠がまず示されて、その後、実際に発見された。超弦理論によるとこの宇宙は実は10次元なのだそうだが、私たちは4次元より高次の時空は認識できない。目は、電磁波の中でわずかに可視光しか見ないように、私たちの感覚は、空間・時間・エネルギー・複雑性のどれをとっても、ごく狭い隙間から世界をのぞき見ている。科学は、この自然的人間の視界を超えたかなた、暗黒のなかに運動し世界を構成し動かしているものに光を当てることができる。

さてしかし、「現実的=合理的」の命題は、以上のように例示は出来ても、証明（反証も）できない究極の大命題である。単なる信条といってもいい。しかし、ヘーゲルはこの命題から誘導される表現として「自由とは必然の洞察である」ということを言っている。これは実践的な示唆である。物事は合理的な法則に従って運動しており、意思を持ってある結果を望むならば、法則を知りそれにのっとった行動が必要だ、ということだろう。望んだだけでは自由は実現しないし、行動したとしても合理性が欠けていたら結果は望んだものにならない。こんなことはヘーゲルに言われなくても当たり前のことである。当たり前を超えるものがあるとしたら、それは、「必然の洞察」、つまり何が合理的なのか、ということの決定的な重要性の認識だろう。私は合理性を支えるものを科学と呼びたい。

自然は目的やゴールをもって変化してきたわけではない。ヒトの歴史はどうか。ヘーゲルはヒトの歴史を「世界精神」なるものの自己実現の過程と考えたが、私には今までの歴史がある目標の実現に向かって進んできたようには見えない。しかし、これからは、人類自ら選んだ共通の良き意図を（すなわち自由）、存在の合理性つまり科学に基づいて（すなわち必然）、社会に実現できるとしたら、歴史ははじめて自分たちのものになるだろう。「人間社会の前史が終わり、本史が始まる」（マルクス）あるいは「理性の王国」（カント）である。これは夢想だろうか。